

火狩りの王

〈三〉 牙ノ火

黒き虚空のかなたより

帰還せる 銀の天つ星^{あまほし}

その糠星^{ぬかぼし}に 祈れかし

そは比類なき月の妹

世を嘆き 人の子を想う

小さき揺らぐ火なれば

第五部 魂の番犬 たましい

- | | | |
|---|--------------------------|-----|
| 一 | 豪雨 <small>ごうう</small> | 8 |
| 二 | 星の追憶 <small>ついおく</small> | 34 |
| 三 | 道行き | 50 |
| 四 | 雷鳴 <small>らいめい</small> | 82 |
| 五 | いかずち | 102 |
| 六 | 飛ぶ星 | 120 |
| 七 | 熾し火 <small>おこび</small> | 146 |

第六部 小さな星 ちい ぼし

- | | | |
|---|------------------------|-----|
| 一 | 水辺の者 | 182 |
| 二 | 鳥の影 <small>かげ</small> | 195 |
| 三 | 明けの星 | 216 |
| 四 | 埋火 <small>うずみび</small> | 253 |
| 五 | 墓 | 271 |
| 六 | 地下の川 | 297 |
| 七 | 樹海 | 352 |



灯子^{とうし} 十一歳の少女。自分をかばって命を落とした火狩^{ひかり}りの形見を家族にとどけるため、首都へ向かう。

煌四^{こうし} 首都に暮らす十五歳の元学生。油百七^{ゆおしち}の元で、雷火^{らいか}の研究を行う。火狩^{ひかり}りを父に持つ。

かなた 灯子^{とうし}が出会った火狩^{ひかり}りが連れていた狩り犬^{いぬ}。火狩^{ひかり}りとともに行動し戦う。

緋名子^{ひなこ} 煌四^{こうし}の妹。胎児性汚染^{たいじせふせん}により生まれつき病弱。体に大きな異変が起きた。

明楽^{めいらく} 流れ者の女火狩^{おんなひかり}り。困難をこえていく力量の持ち主。狩り犬^{いぬ}はてまり。

火穂^{かほ} 厄払いの花嫁として村を出された。回収車^{かいしゅうしゃ}で灯子^{とうし}と出会う。

照三^{しょうぞう} 回収車の乗員。灯子^{とうし}たちを首都に連れて行くところゆいで大けがを負う。

クン 〈蜘蛛^{くも}〉の子ども。森に捨てられていた。

炉六^{ろろく} 島出身の凄腕^{すうで}の火狩^{ひかり}り。狩り犬^{いぬ}はみぞれ。

油百七^{ゆおしち} 燠火家^{おきびけ}の当主で偽肉工場^{ぎにくこうじょう}の経営者。煌四^{こうし}に雷火^{らいか}による武器開発を指示。

綺羅^{きら} 燠火家^{おきびけ}の一人娘。美しく聡明^{そうめい}。

火華^{ひばな} 油百七^{ゆおしち}の妻。年齢不詳^{ねんれいふしょう}の妖艶な夫人。貧民区^{ひんみんく}の出身。

ひばり 神族。風氏族に属し、人間を監視^{かんし}するしのびを自在^{あやつ}に操る。

シユ・キリ・ヤナギ・クヌギ 首都の隔離地区^{かくりちく}に住む木々人^{きぎびと}たち。

くれば 燠火家^{おきびけ}の使用人だったが、行方知れずとなった。

第五部 魂の番犬

一 豪雨

血まみれでがたがたふるえていた灯子が、はたとなにかに当惑したようすを見せて、身動きを止めた。頭から浴びた炎魔の返り血、はらわたの残骸のために、着物をまとった灯子の全身はべっとり汚れ、悪臭がこびりついている。汚れて乱れた髪が、幾すじも顔に貼りついていた。

「……あ、明楽さんが、けがをしておって」

顔をうつむけ、灯子が弱々しい声を発した。その手が、火狩りがあつかう武器であるはずの三日月鎌をにぎりしめている。煌四が油百七に見つかるのをおそれて、うけとるのを辞退した火狩りの鎌。父親の遺品であるその鎌の刃には、黒い血と炎魔の体毛がぬめりつき、それがふるわれ、たばかりなのだとわかる。

信じられなかった。これを使って、灯子が、結果を越えてきた炎魔と戦ったのだ。金にでも換えてくれればと、煌四がつかえしてしまった鎌で。

お姉ちゃん、と呼びかけながら、三つか四つほどの男の子が、灯子の着物のそでをつかんでしきりに揺する。灯子は中途半端にうつむいて、その呼びかけに反応しない。男の子が引っぱるにまかせて、頭や髪を危なっかしくぐらつかせるだけだ。

白塗りの鳥居にかこまれたトンネルの手前には、結果にはばまれて首都へ入りこむはずのない炎魔たちが、森から続々とさまよい出ている。すでに息絶えている同族たちを踏みこえて、なおも赤い目を光らせ、工場地帯へ押しよせてくる。炉六とみぞれ、そして明楽が、森の腐臭をまつわりつかせた大量の炎魔たちを迎えうっていた。

正気を失った獣たちの足どりはおぼつかず、口からはしたたるほどのよだれを垂らしている。どの獣も、病にとり憑かれて身もだえているように見えた。おそらく炎魔本来の動きはできていない。火狩りたちがここで食い止めるには有利となるが、なによりもまず、炎魔はその数が圧倒的だった。

戦いからはなれ、あなたが灯子を守る位置に立ってうなっている。あなたの遠吠えが、工場地帯へむかおうとしていた煌四たちの耳にといたのだ。尾をふり立て、毛並みの先まで緊張をみなぎらせているかなたは、焚三医師や煌四に牙をむいたあのとくとは一変し、父のそばにいたころのすがたそのものだった。

「大丈夫だ、あなたが呼んだおかげで、加勢に駆けつけたから。もうすぐ、ほかの火狩りたちもここへやってくる」

かなたのそばには、きつと緋名子がいるはずだ——いっしょにいてくれ、無事でいてくれ、そう念じながら、必死で走ってきた。そうしてたどり着いた場所には、たしかに緋名子がいた。出ていったときの寝間着すがたのまま。熱はないようだが、あちこち泥だらけになって、はだしの足には無数のかすり傷ができています。

「……緋名子、もうどこにも行くなよ」

建物の壁を背にし、決してこちらへ近寄ろうとせず立ちつくしている緋名子に、言葉をむける。煌四は生まれてはじめて、妹をにらみつけた。緋名子の細い肩が、びくりとすくむ。けれど、やはりその顔に表れる表情は薄く、瞳はべつの世界を見ているかのように、読みとることのできない動きをする。

煌四は、齒嚙みした。いつもいつも、熱を出しては、なにかにおびえては、煌四の足にすがりついてくるのに。どうしてこんなときに、壁に背中をくっつけたまま、はなれて立っているのだ。やっと再会できたのに、なぜ一度も煌四のことを呼ばないのだ。

緋名子の足もとには、動かない小さな体が横たわっている。その子どもを知っていた。灯子と

いっしょに、町の路地から隔離地区へとあとを追った木々人だ。シュユという名だった。幼い木々人は、やわらかな手足から生えた木の葉を枯らし、首をくったりとかたむけて目を閉じている。首には牙によるものと見える深い傷があり、骨が折れまがっている。もう、死んでいる。

シュユの死が、灯子に鎌をふるわせたのだろうか。わからない。とにかくいまは、灯子とその腕を揺する男の子、そして緋名子を安全な場所へ逃がさなくてはならなかった。

「歩けるか？ これはもう、はなしていい」

灯子に呼びかけ、鎌の柄をにぎったままの手を開かせようとした。が、灯子の細い手は、ますますきつく鎌をにぎりこむ。

「首都の火狩りがみんな来る。灯子は、もうこれを使わなくていいんだ」

呼びかける声が、ほとんど懇願の響きを帯びた。はげしい後悔が、煌四の背におおいかぶさってきていた。あのとき、すなおにこれをうけとり、自分がどこかへ隠しておけばよかったのだ。村を出て森を越え、やっとの思いでとどけてくれたというのに。煌四が無責任につきかえしたりしたせいで、灯子のような子どもが炎魔と戦うはめになってしまった。

「あのう……さっき、そこに……女の子が、おりましたか？」

視線をうつむけたまま、左手の指で、灯子がゆるゆると頭上を指さす。

「え？」

煌四は眉を寄せ、ちらと上を確認してから、首をふった。

「だれもない。行こう。ここにいたら危険だ」

「でも、明楽さんが」

言いつのる灯子のようなすがおかしいことに、煌四はようやく気がつく。全身のふるえは止まったが、鎌をにぎる手にも煌四につかまろうとする手にも、痛いほどの力がこめられ、うつむいたきりの目はどこにも焦点をあわせていない。

「お姉ちゃん」

男の子がそでを揺ると、それにあわせて灯子の頭もぐらりとかしぐ。

「けが、したのか？」

肩をつかんで顔をのぞきこむ。灯子は煌四の顔に視線をむけないまま、首をかしげるようにかぶりをふった。

「明楽さんは……？　あなたは、ここにおるんですか？　……目が、見えません」

ごめんなさい、とつぶやく灯子の声が、炎魔の咆哮にかき消された。

（目……？）

焦りが、ひたいに汗をかかせた。灯子の目に、傷がついているようすはない。だが、どこにも焦点をあわせていない目が、光をとらえられていないのはほんとうのようだ。

灯子の肩を支えながら、トンネルのほうを見やる。炉六とみぞれが、大小かまわず確実に炎魔を狩ってゆく。それといっしょに戦う明楽もまた、金の鎌をふるっている。しかし、その動きにしなやかさはなく、灯子の言うとおりでい傷をおっているのがこの距離からでもわかった。

「とにかく、行こう。ここからはなれないと」

煌四は灯子の手を引こうとしながら、緋名子をふりかえる。緋名子の目は煌四を見ず、足もとに横たわる木々人の死体を見おろしている。その暗いまなざしが、なおのこと煌四を焦らせる。また、人間ばなれした動きで、どこかへ駆け去ってしまうのではないか。こうするあいだにも、緋名子の目は、退路を探っているのではないか……

そのときだった。かろうじて受け身の姿勢をとりながら、明楽が先ほどの灯子と同じに、こちらへ投げ飛ばされてきた。返り血も本人の出血もいっしょくたになって、あたりに飛び散る。くせのある赤毛が、頬にへばりついている。

「――なにすんだ！」

すばやく起きあがって鎌の血をふりはらいながら、明楽が炉六にむかってとなる。大けがを

おっているとは思えないほどの大声だった。トンネルの方角から、白い毛玉のようなあの小さな犬が、明楽を追って走ってくる。

煌四は目をこらし、結界を越えてきた炎魔の数を見さだめようとする。すでに息の根を断たれて動かないものも多いが、あとからあとから、結界の鳥居さえへし折りそうなほどの数が押しよせてくる。

「けが人は引っこんでいろ。千年彗星が来たぞ。ここでお前が死んだのでは、兄貴も浮かばれんだろうが」

炉六のよこした言葉に、明楽がぐっとくちびるを噛む。呼吸は乱れきり、傷だらけのその体では立っていることすらままならないはずだった。

「ここはまかせて、とっとと神宮へ行け。〈蜘蛛〉に先を越されるぞ」

工場の稼働音も、炎魔の群れの咆哮もすりぬけて、炉六の声がとどく。狼の炎魔の首を切り裂き、山羊のつを手がかりに身をおとりあがらせて脛骨を断つ。ムササビや狐、小型のものは、みぞれが目では追えないほどの俊敏さで歯牙にかけてゆく。

「だって……」

言いかけた明楽のかすれる声は、よどみなく動きつづける機械の音にかき消された。工場は動

いているが、いまこは、ほぼ無人と化しているはずだ。海ぎわの家をあとにしたその足で、煌四は学院の教師たちが集まっている屋敷へむかった。そしてなりふりかまわず、いまずぐに工場から人々を避難させるよう呼びかけてくれたのんだのだった。直前に上空に現れた燦然と輝く彗星を、その場にいた者たちも目撃しており、火十先生の「燠火家さんのお達しだから」という言葉に後押しされて、経営者を身内に持つ教師たちは、すぐさま動いてくれた。

「いっしょに来てください」

煌四の声に、明楽がふりかえった。呼吸が荒い。

「ここには、もうすぐ首都の火狩りが集まってくる。灯子の目が、見えないみたいだ。安全な場所へ移したあと、ぼくは雷火の打ちあげ位置にむかいます。神宮へ行くなら、早く」

そう呼びかけながらも、こんな体で神宮まで行けるはずがないとも思う。さっきまで炉六たちとともに炎魔を狩っていたのが、信じられない。明楽のひたいからはあごまで血が流れ、肩や背中、腕から首にかけても深い切り傷でいっぱいになっている。出血もかなりの量だ。煌四は、トンネルのそばにある貧民区へ目をやった。明かりはみな消されているが、あそこの住民はまだ避難していないかもしれない。仮に人がいなくとも、水や布は手に入るはずだ。灯子たちを安全な場所へ移動させ、明楽の手当てをしなくては……

「目？ 灯子が？」

明樂の犬、てまりが、主と煌四を見あげてギャンギャンとわめき立てた。

（まだか？ ほかの火狩りたちは…… ひょっとして、しのびが邪魔をしているのか？）

際限なく結果を越えてくる炎魔から、明樂は目をそむけられずにいる。ここで食い止めることができないければ、工場からの人ばらいをしたとはいえ、首都は簡単に破壊されてしまうだろう。

炉六が血だまりに足もとをすべらせ、咬みかかってきた小型の猿の炎魔を、危ういところできとめる。炉六一人でここを守るのにも、もう限界が来ている。

煌四は頭の芯にしびれを感じながら、鎌をにぎったままの灯子が無理やり肩に担ぎあげ、壁を背にした緋名子となりまでさがる。煌四が近づいたことで身をこわばらせる緋名子の手首をとった。煌四の手で軽々とにぎりこめるほど細い手首を、力をこめてつかんだ。反射的にか、つかまれた手を引っこめようとする緋名子に、低く声をたたきつけた。

「逃げるな！」

びくりと、緋名子が動きを止める。なにも見えていないという灯子まで、煌四の声に身をすくめた。ずっと病気で、泣き虫で、自分や母をたよるばかりだった妹をとなりつける。それが、こんなに怖いことだとは思わなかった。想像してみたことすらなかった。頭の中で血が沸き立って、

暗い視界にでたらめな模様がいくつもはぜた。煌四の中で形をたもってきたなにかが、あるべきでないすがたに変容してゆく。

強い雨の襲来する気配が、煌四の耳もとをざわつかせたそのときだ。

「……うううう」

間近で、獣じみたうなり声がした。とっさに、炎魔が近づいてきたのかと身がまえる。が、肩をいかせて食いしばった歯のあいだから声を発しているのは、さっきまで灯子を揺すっていた小さな男の子だった。幼い全身をわななかせながら、男の子はかなたの前まで歩み出る。

小さな男の子のあげるうなり声が、あたり一帯の空気の底をふるわせた。男の子は一心にトンネルの手前をにらみ、低いうなりを空気に送り出しつづける。煌四の体を、少年神ひばりと対峙したときと同じ、根源的な恐怖がつきぬけてゆく。

人の手を借りずに動いている工場群からこぼれる照明と、まだらをえがく暗闇。その黒さが、いびつにうごめく。男の子の足もとで、影がうごめいて這いずりだす。……虫だ。男の子の衣服のすそから、おびただしい数の虫が這い出し、炎魔のいるほうへむかってゆくのだった。あるものは細い触角をかかげ、あるものは無数の脚を動かし、あるものは腹を蠕動させながら進み、あるものは翅を使い、またあるものは、八本ある脚をよどみなくくり出して。

〈蜘蛛〉――

その言葉が、煌四の意識を埋めつくした。虫たちはトンネルから出てくる炎魔と同じく、際限なく男の子の服の下から這い出してくる。目の前にいる、気づかわしげに灯子に呼びかけていたこの子は、人ではないのだ。

虫たちが、そろそろと炎魔にむかって進んでゆく。炉六とみぞれが異変を察知して、炎魔の群れから一旦しりぞく。

男の子のうなり声はしだいに高まり、かん高いわめき声になっていった。息つきもしていない。子ども特有のかなきり声が、闇をつんざいて響きわたる。

「クン……」

煌四が担ぎあげている灯子が、背後で声をわななかせて身じろぎする。

幼い〈蜘蛛〉のはなった虫たちは、炎魔の群れに着実に到達し、その中へもぐりこむ。黒い毛皮の獣たちと小さな虫たちのすがたは、夜の中であっというまに溶けあい、見わけがつかなくなる。トンネルの手前からこちらへむかおうとしていた炎魔たちが、とたんにばたばたとたおれはじめた。虫たちが毒によって、一瞬で猛々しい獣たちの命を食いつぶしたのだ。

腹の底が凍えた。全身をこわばらせて立つ小さな背中を見る自分の目に、畏怖が浮かんでいる

のをはつきりと感じる。煌四のおそれは、きつと緋名子や灯子にも伝わってしまっている。

虫たちにも動じることなく炎魔の動向を見すえていたかなだが、びくりと耳を動かした。明樂が、俊敏にふりむく。工場地帯のむこうから、犬の声がいくつもかさなって聞こえてくる。

やっと、火狩りたちが駆けつけたのだ。狩人たちのかけ回る照明が、地を這い、宙を飛ぶ虫たちを照らす。こみあげてきた安堵はしかし、つぎの瞬間、虫を操る男の子に飛びかかっていった獣の影に破り裂かれた。

炎魔ではない。狩り犬だ。小柄で毛足の短い一匹の犬が、まっすぐ男の子に、いま炎魔をたおしている子どもに、襲いかかっていった。

〈蜘蛛〉だ、とどれかのさけぶ声がした。

うしろから狩り犬に飛びかかれ、〈蜘蛛〉の子が路面に転倒する。狩りのため鍛えられた犬は、ためらいなくその首すじに食らいつこうとする。煌四が動こうとするより先に、明樂の足が犬のしりを蹴りあげていた。ギャンと悲鳴をあげ、小柄な犬は横ざまに吹き飛ばされる。

「……面倒な」

炉六が舌打ちをするのが聞こえた。首都の火狩りたちが駆けつけてくる。最初に感じた安堵は、いまやふりはらいようなない怖気に変わっている。

「おい！ こっちだ、炎魔がまだ来る！ どんどん狩れ！」

炉六が声を張りあげた。大多數の火狩りは、同族の死骸を踏みこえて崖のむこうから現れる炎魔に、金の鎌を光らせ、犬を従えてむかってゆく。炎魔を狩ることを生業とする狩人たちが、獣たちを食い止めるために走ってゆく。犬たちがあらんかぎりの力で駆ける。手に手に三日月鎌をたずさえた火狩りたちは、まちがいないく炎魔を狩ってゆく、はずだった。

煌四の肩で、灯子が身をよじろうとする。が、手にした鎌が煌四を傷つけることをおそれたのか、動きを鈍らせる。なによりいま、灯子は目が見えないのだ。あなたが、ただならぬ量の殺氣を感じとって、全身の毛をふくらませる。

路面にたおれた〈蜘蛛〉の子に、明楽がおおいかぶさる。その動作がごく自然なものに感じられるほど、火狩りたちのはなつ気迫は圧倒的だった。

「どけっ！」

だれかが明楽のこめかみを蹴りあげる。また血が飛ぶ。体勢を崩した明楽の腹に、つま先がめりこむ。はげしくむせて腹部を押さえ、明楽は起きあがることができない。てまりがちつぽけな牙をむき、全身で威嚇するが、それにひるむ者などいない。炎魔にまっすぐむかわなかった十名ほどの火狩りたちが、あつというまに〈蜘蛛〉の子をとりかこむのを、煌四はその場に凍りつい

たように見ているだけだった。

実際にはそれは、たいした長さの時間ではなかったろう。が、鍛えあげた狩人たちが、訓練された犬とともに幼い子ども一人を痛めつけるのには、充分すぎる時間だった。

〈蜘蛛〉の子の二の腕を、だれかがつかんで引きずり起こすのが見えた。犬たちがはげしく吠えたり。子どもの体を殴打する音は、水のつまった袋を、壁にたたきつけるのに似ていた。

(なんだ……これ)

問いが熱を帯び、沸騰しながら湧きあがってくる。この火狩りたちは、なにをしている？ あの子どもは、たとえ正体が〈蜘蛛〉なのとしても、首都へ入りこむ炎魔と虫を使って戦っていたのに。

トンネルの手前では、新たな炎魔を火狩りたちが数で押している。それをしりめに、この路地に残った者たちは、小さな子どもをなぶり殺しにしようとしている――

「……聞こえなかったのか、炎魔はあっちだ！」

煌四は大声でさけび、緋名子の手だけははなさないまま、灯子をおろして自分のうしろへ座らせた。

あいた手でかばんの雷瓶を探る。頭に血ののぼったあの火狩りたちの目を、閃光でつぶさなけ

れば。

が、そのとき煌四の体が、大きくかしいだ。まったく予期できなかった。手首をつかまれたままの緋名子が、煌四の手をふりほどいたのだ。肩がぬけるかと思った。信じられない腕力で煌四の手から逃れた緋名子は、舗装を蹴って高々と小柄な身をおどりあがらせた。それと同時に――上空に垂れこめた雲が、ふとその緊張を断つ。地べたで起きる惨状へ、雨がふちまけられた。空気をうならせながら、地上の者たちへ鋭い爪を立てるように、雨が一拳に降りしきる。蹴りつけた《蜘蛛》の子の髪の毛をつかみ、やすやすと持ちあげた体をさらになぐっている火狩りたちの中心に、緋名子がおり立つ。一瞬で路面を水びたしにした雨が、緋名子の足に踏まれではじける。牙をむく狩り犬たちは、突然のことにわずかな混乱をきたす。髪をつかまれ、宙吊りにされた《蜘蛛》の子は、ぐったりと力を失っていた。

「やめろ！」

起きあがろうともがきながら、明楽が声を張りあげる。その言葉は、火狩りたちにむけられているのだと思った。しかし明楽が緋名子にむけてさけんだのだと、煌四はしびれてうまく動かない頭でやっと理解する。

緋名子は《蜘蛛》の子を持ちあげている火狩りを見あげると、おどろいているその火狩りの、

脚のつけ根のあたりに手をつきこんだ。ポケットに甘いものを見つけた子どもが、待てと言われのを聞かずにお菓子を奪おうとするように。……ただそれだけに見えたのだが、《蜘蛛》の子を捕らえていた火狩りは、絶叫しながらうしろざまにたおれこんだ。その脚のつけ根から、血しぶきの飛ぶのが見えた。緋名子の細い素手にも、なにか黒々とした液体がついているのが。

どんな言葉を探すことも、できなかった。

ただ息を引きつらせる煌四を、かなたが一瞬、心配そうにふりかえる。

投げ落とされた男の子の体をかえあげ、緋名子は周囲に立つ火狩りたちを見あげる。きつとなにが起きたのか理解できないまま、それでも男たちは、狩人の本能からすぐさま戦いに立ちかえる。

「お前も《蜘蛛》かあ！」

裏がえりそうな怒声が緋名子にむけられるのを、煌四はたしかに聞き、聞いたと同時に思考と身動きを縫いとめていた糸が切れた。雨が全身を打つ。

かばんから、雷瓶をとり出す。瓶を包んでいた保護用の布を雨の中へ捨て、投げようと腕をふりかぶった。ガラスに閉じこめられた黄金の火が、手の中で波を打つ。――が、瓶をかまえたままの手首を、だれかにきつくつかまれた。

「——おいモグラ。そんなもん光らせたなら、よけいにこの場が混乱する」

無愛想な声とともに、臭気が鼻をつく。ふりむくと、ぼろをまとった木々人が背後に立ち、煌四の手首をにぎっていた。雨にぬれた髪が、刺青の彫られた頬にまといついている。その左腕から生えた細い枝葉が、雨をうけて重たげにおどつていた。

灯子とともに地底で会った木々人だった。キリという名の。

煌四をにらんでいた目が、ふとそらされる。眉間にしわを寄せ、キリが見つめているのは、路面にたおれふしてもう動かない幼い木々人、シユウの亡骸だ。

「……だから、鳥なんか」

ほとんどひとりごとだったのだろう。小さな仲間を見つめるキリの声は、雨音にかき消されてうまく聞きとることができなかった。背後の壁ぎわに座らせた灯子は、火狩りの鎌をにぎりしめたまま、視線をむけるべき光を見つけられず、瞳をたよりなくさまよわせている。

暗くつめたい波のような気配が煌四の胸におおいかぶさり、怒りも衝動も思考も、圧倒的な重みで打ちひしいる。小さな者たちが無残に打ちのめされているのに、それを救う存在がいない。心臓がどつどつと無遠慮にはねまわるが、それすら自分とはかわりのないことに思われた。自分はものを知らず、なにもできない子どもだ。それは身に染みてわかつているはずだった。

(だけど……)

無知であろうと、できることがあるはずだ。前方の緋名子。うしろにいる灯子。《蜘蛛》の子。けがをしている明楽。……全員をたすける方法を探ろうとする。雨の音が、うるさく頭の中をかき乱す。

「千年彗星が……《揺るる火》が来たぞ！」

片ひざを立てて背すじを伸ばし、明楽が雨音をしりぞけてさげんだ。

「星を狩り、火狩りの王が人々を治める。そのときが来た。火を狩る鎌を、王になるためにふるうときだ！」

明楽の言葉に、この場の火狩りたちが気おされたようすを見せる。てまりが、飛びあがりながら吠えだてる。脚のつけ根からはげしく出血し、のたうちまわる火狩りのそばに、《蜘蛛》の子がたおれ、それを守るように身を低くかがめて、緋名子が周囲をとりかこむ男たちを、犬たちを凝視している。

一匹の炎魔が、群れをぬけてこちらへ来る。本来ならば、土や岩を踏むはずの蹄が、人が造った平らな舗装をいらだたしげに蹴りつけながらこちらへむかってくる。赤く燃える瞳はとうに正気を失い、草食獣の持つ逃走本能の残り火だけが、それを走らせているかのようだ。